

Takashima Toujyu Kai

会報

No. 23

2020.5.18

高島藤樹会

(題字は、竹脇曇卿先生によるものです)

発行

NPO法人 高島藤樹会

〒520-1224

滋賀県高島市安曇川町上小川 225-1

藤樹書院・良知館内

電話・FAX 0740(32)4156

新型コロナウイルスと

藤樹を生んだ高島の風土

高島藤樹会 理事 川島 達郎



どうしたか。昨
となのか。昨
年世紀の御代
替りで、穏や
かで風情あふ
れるイメージ

の令和に元号が改まったばかりである
と云うのに世の中は全く裏腹にコ
ロナショックで打ちひしがれている
有様だ。この様な最中に、一応私も
及ばずながら会員の末席を汚させて
頂いている関係で高島藤樹会より原
稿の依頼を受けた。平静になれない
中で事もあろうに藤樹先生に多少な
りとも因んだ想いを述べるには内心
忸怩たるものがあるが、お許しを得
て述べる事にする。

書き綴っている四月十二日の時点
では全く終息の兆しが見えないどこ
ろか感染拡大の一途をたどっている
。恐らく経済的影響は、第二次世
界大戦以降で最も急激な未曾有の経
済の落ち込みになり、これからは私
達が今までに見たこともないような
ショックキングな状況を目にするこ
とになるだろうと言われている。既に
パンデミック(感染症の世界的大流
行)の様相を呈しており、まるで見
えない敵によって世界中の人類に挑

み襲い掛かってくるさながらSF映
画のエイリアンそのものようであ
る。

しかし私は全く別の事を考えてい
る。今回の新型コロナウイルスの発
生は、人間が地球規模で天然資源等
を求め、森林をはじめとした大規模
な自然破壊を続けている事と決して
無縁ではないと思っている。人間と
離れて静かに暮らしていた野生生物
たちが、住みかや餌を失い生態系を
壊されて人の生活圏に出没するよ
うになり、人間の近くにいる家畜
やペット等を介して新たなウイルス
を生み出している様に思えてならな
い。エボラ出血熱、鳥インフルエン
ザが、SARS(重症急性呼吸器症
候群)など全て然りだ。これらは明
らかに、人間社会がエゴと我欲で突
き進んできた自然破壊がもたらした
天からの警鐘乱打、鉄槌を下され
たと見るべきだと思う。

政府は四月七日に緊急事態宣言を
発出し日を追う毎に感染者数は増え
続けているが日本は世界と比較して
まだまだ少ないほうであり、気の毒
にもお亡くなりになった方も極めて
少ない。さらに着目すべき事に、我
が高島市からは今のところ感染者は
皆無だという事実だ。人の暮らしと
多様な生き物を育む自然がみごとに
共存し、調和している、いわば日本
の美しい原風景、いわゆる里山が随
所に散見できるのが私達の郷土であ

る。そして自然と人間の調和の接点
として鎮守の森が存在し、その周辺
に集落が形成され地域社会が守られ
てきた。蛇足ながら私は昨年と一昨
年にわたり氏神の宮世話を務めさせ
て頂いた。決して宗教的ではなく、
自然に対して畏敬の念を払う事は日
本人であれば極当たり前の流儀であ
り、神社は人々の精神的な拠り所と
なっている事がよく理解出来たと
思っている。そう言えば私の座右の
銘の一つに「敬天愛人」がある。

私達はよく知っている。私達は自
然から多くの恵みを頂いて生活して
いる。しかし一方で自然は荒ぶるよ
うな厳しさも兼ね備えており、一つ
間違えると牙をむいて私達人間社会
を容赦なく襲いかかって来るのであ
る。そこで私達は知恵を発揮し、自
然の恵みは神々からの恵みであり、
従って自然への感謝は神への感謝に
他ならないと言ふことを身をもって
悟っている。自然に対する畏怖と感
謝の念を抱きながら日常生活に於い
て自然と共生しているのが高島での
暮らし振りだと思ふ。祈りと暮らし
の水文化が日本遺産に選定された様
に、高島の持つ口ハスでエシカルな
ライフスタイル、さらには結いの社
会で互助や利他の精神がしっかりと
根づいている風土こそが藤樹先生の
ような高邁な人材を生み出した源で
あると、私達は自信と誇りを持てる
のではないか。